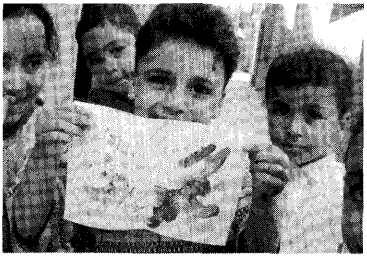
青年海外協力隊
途上国における保育実践

宮上悦子

途上国からの要請

日本の国際協力は、一九五四年一〇月六日『コロンボ・プラン』に加盟した日をもって始まりました。その後、政府の国際事業の一元的な実施機関を設立する構想が生まれ、国際協力事業団（JICA）が生まれました。青年海外協力隊の職種は整理統合され、現在八つの部門に分かれ、幼稚園教諭・保育士は、教育文化部門の中の幼児教育の職種に位置付けられています。一九七六年、インドからの要請を受けて以来、これまでにアフリカ、アジア、中近東、中南米、オセアニア、欧州に累計五三〇名の幼稚園教諭・保育士が派遣されています。

派遣期間は二年間、派遣先は幼稚園や保育園、孤児院、養成学校などが主ですが、「折り紙、ゲーム、お絵描き、運動」など保育内容にかかわるものだけでなく、「日本の幼児教育についての紹介」や「カリキュラムづくりに関する協力」、また「遊びをとおして学ぶ必要



写真：石井優子

性」や「自由遊びの意義」の普及など、教育の基礎理論にかかわる要請もあります。途上国の幼児教育は、やっとその重要性に目を向けられてきたという状態ですから、幼児教育に携わって四～五年以上の経験者にとっては、本当にやりがいのあるものといえるでしょう。

中南米における幼児教育の現状

中南米カリブ海にあるD国に派遣されたサトミ隊員は、一〇箇所の幼稚園を巡回するのが主な仕事でした。そこで最初に目に付いたのは、幼稚園の建物周辺にゴミが散乱する景色でした。そして暮らしてみて、人々は、大人も子どもも、ゴミを構わずそのあたりに捨てるということに気がつきました。

またC国のユキ隊員は、バスの窓からゴミを捨てた子どもを母親が珍しく叱っているので様子を見ていると、「座席の後ろに行って捨ててきなさい」と言ったということです。衛生の概念も大雑把で、パンを食べながら遊ぶ、いらなくなると、そのあたりに置きっぱなしにすることも日常茶飯事な光景です。四〇〇〇メートル級の高地では、水が出ないのでほとんど手洗いをしていません。また他の国に派遣されたサツキ隊員は、明らかに眼病と思われる子どもから、次々とほかの子どもたちにも病気が伝染している状態を園長や先生に話したところ、「心配ない。全員に伝染すれば悪い菌は去っていくよ」という返事が返ってきたというのです。

ゴミの問題に限らず、幼児の保育の認識は、かなりわれわれ日本人のそれとは違っています。先生は子どもをかわいがるにもかかわらず、子どもが勉強の難しさ、つまらなさに騒いだり、また言うことを聞かないと、たたいてしまうこともあります。中にはムチを見せることもあり、勉強のできない子には、「まるで、のろまなロバのようだ」と面と向かって言ったりします。筆者も実際に視察した園で、保育中なのに先生が

台所でのんびりお茶を飲んでいたり、ほかのクラスの先生が、新しく購入したスラックスを楽しそうに見せ合っている光景を目にしたことがありました。

陽気な国民性ともいえるのでしょうが、いつまでも子どもをおいて楽しそうにしている先生たちを見ながら、保育室にいる子どもたちがけんかやけがをしたらどうするのかと心配する隊員たちは、自分がここで、派遣された本当の意味に気がつくのです。

国の保育者養成機関もない、幼児教育の専門の知識をもたない先生たちは、子どもとともに歌をうたったり、遊んだりする意義を知りません。そればかりか、乳児から就学前までの子どもの発達の違いを知らないので、三歳児にも時間割を立て、読み書きや、先生が板書したものを繰り返し書き写しをさせています。そして、大人も子どももあまり自分で考えることをせず、何かというとすぐ「教えて」を合言葉のように言ってくることが多いのです。

また、保育室には、子どもの遊ぶ遊具はあまり見当たりません。勉強が第一だからというだけでなく、遊具が高価であるからともいえます。筆者の視察したB国では、登園してくる子どもたちのリュックの中には、家から持参したおもちゃが入っていました。子どもたちに混じって、まだあどけなさの残る童顔の先生が、熱心にそのおもちゃで遊んでいる様子が見られました。

手作り遊具

物資が少ない環境では教材を「手作りすること」が大切な保育内容になります。中には文字が読めない、ハサミが使えないという先生もいます。隊員もその国の言葉だけでは、必ずしも充分に説明できませんので、見本を作り、必要な材料を用意します。途上国の方たちは不要になった物の使い回しが上手なので、「廃品」という考え方には課題が残るのですが、小石

や瓶のふたなどの身の回りの物などで作る隊員の手作り遊具は、子どもたちの興味の的になります。人形や車、動物、船などに生まれ変わる遊具で、子どもたちはすぐに喜んで遊ぶようになります。そうすると子ども同士の遊びが広がっていき、遊具をお互いに見せ合い、貸し借りする姿が見られ、子ども同士のかかわりが生まれ、また遊具を自分の物として大事にしようとする姿が生まれることなどを、遊具で遊ぶことを通じて先生たちに知らせていきます。

国の将来と幼児教育

D国のサトミ隊員は、活動を続けながら、その国の園長たちに「この国の子どもたちにどのように育ってほしいのか」と尋ねてみました。すると「それは私たちが考えることではなく、政府が考えることだ。それよりあなたは何年も日本での経験をもっているのだから、それを教えて」というのです。

そこで、「この国の子どもたちの将来を見通した教育を考えていくことが大切なことだから、一緒に考えていこう」と話しても、芳しい会話は続きません。「考える」という単語は、この国にはないのだろうか、と真剣に考えてしまったということです。

今から数年前のこと、筆者がアフリカのN国の教育関係者Wさんから伺ったことですが、Wさんは「わが国は多くの部族がいて、言語数も多い。そこで、公用語のフランス語を早く教えてほしいというのが親のニーズなのです。小学校の授業がすべてフランス語なので、フランス語ができない子どもは落第してしまう。幼稚園で五歳になるとフランス語を覚えさせることも、やむを得ないのです。日本の先生のように子どもの力を信じて、楽しい環境の下に情操豊かな教育をと願っているが、このような現状で、今何が一番必要なのかを考えると、暗記や詰め込みも仕方がないのです」と、はっきり話されていました。この国の幼児教

育のリーダーとして、真正面から現実と向き合い、そして未来への確かな子ども像を、隊員の活動の中で探っていることをWさんの言葉から感じたのです。

発想の柔軟性

E国でのユウコ隊員は、幼稚園であるにもかかわらず時間割が決められ、そのすき間に入りこむ余地がなく、子どもたちの写真を撮るだけの日々が続きました。しかしある日、撮り切ったそのフィルムの現像を街の写真屋に頼むと、現像一回につき水溶性のカラーペンのおまけが一本付くことを知って、これだ！ とひらめきました。

図工の時間の子どもたちの絵を見ると、モノクロのペンを使い、自由に描くことがなく、木はこんな形、男の子、女の子、太陽、月、魚と与えられたテーマに従ってどの子も決まった表現しかしていません。本来のその子らしさを発揮し、自由に豊かな感性をもって色遊びを楽しんでほしいとばかりにユウコ隊員は、せっせと写真屋さんに通ってカラーペンを集め、幼稚園に持っていきました。この思惑は見事に的中し、子どもたちも先生たちも、カラフルなペンを前に「描きたい。ユウコ教えて」とようやく声をかけてきました。

このような発想と柔軟性は、保育の基本として大切ですが、無から有を生みだすことが必至の途上国ではさらに見逃せません。この後も、縄跳びがほしいと考

えたユウコ隊員は、海辺の漁師に頼み、使えなくなった魚網から長縄を作りました。筆者は、この手製の大縄を使って楽しそうに遊ぶユウコ隊員や子どもたち、それをうたいながら見ている先生たちを間近に見て、ようやく居場所を勝ち取ったユウコ隊員の心情に少なからず感動を覚えたものです。

未来に向かって

現在、中東のS国では、基礎教育に重点をおくという政策にのっとって、次々に隊員の派遣要請が続いています。一九九六年、ショウコ隊員は、S国の第一号として派遣されました。現地のボスから「そんな語学力で、先生方への授業は大丈夫?」と、語学習得の不備を指摘されたショウコ隊員は、『インシャ・アッラー』(神がお望みであれば)と言ってのけました。とっさのユーモアを使う隊員に、さすがのボスもにっこり。みごと会談成立。まさに当を得たタイミングのよさ。イスラム文化の決め言葉を巧みにこなす意気のよさ。隊員の本懐ともいえるあっぱれな姿と言えるでしょう。

このように隊員の熱意が派遣国の関係者に通じ、少しずつ実りを見せてきている国もあります。国の視学官や園長が日本に研修に来られるようになってきました。日本の幼稚園で、子どもたちが元気に走り回り、ルールを考えながら遊びに興じ、イメージ豊かな表現活動を展開する姿や、先生たちの豊かなアイデアなどで「遊びながら学ぶ」場面に接し、さらにそれが子どもの成長発達に重要なことなどを理解していくようです。帰国後、自分の研修報告会を現場の先生たちに実施し、それが刺激となり、また翌年には、次の先生たちが研修に訪れています。

明確な教育モデルがなかった途上国の幼児教育ですが、ほんの少しずつ、未来に向かって明るい展望が見えているのは確実だといえるでしょう。

(青年海外協力隊　前幼児教育技術専門員)